

[各種報告]

## 九州共立大学リコンディショニングルーム利用者報告

—2011-2012年において—

井手 裕子<sup>1)</sup>, 藤井 均<sup>1)</sup>, 有吉 晃平<sup>1)</sup>, 篠原 純司<sup>1)</sup>

### Annual report of Kyushu Kyoritsu University Reconditioning Room -2011-2012-

Yuko IDE<sup>1)</sup>, Hitoshi FUJII<sup>1)</sup>, Kohei ARIYOSHI<sup>1)</sup>, Junji SHINOHARA<sup>1)</sup>

#### 1. 緒言

1994年から日本体育協会が始めた、日本体育協会公認アスレティックトレーナー（以下、AT）の養成も今年で19年目に突入する。AT養成事業は主に二つの柱から成り立っており、一つはAT養成講習会、もう一つは免除適応コースである。AT養成講習会とは、日本体育協会加盟団体（都道府県体育協会、中央競技団体）または日本体育協会が認める国内統轄競技団体から推薦され、日本体育協会が認めた者が参加できるもので、定員は毎年100人程度とされている。この養成講習会へ参加する者の多くは既にトレーナーとして活動している者が対象となっており、基本的に学生や未経験者は参加する事が出来ない制度になっている。一方で、免除適応コースは、日本体育協会が定めるカリキュラムと同等の教育課程を認定された体育系大学や専門学校を中心に履修する事が可能で、履修した者は卒業時に日本体育協会へ修了証書の発行を申請する事によって養成講習会の免除ならびに試験の一部免除を受ける事が出来る<sup>1)</sup>。1997年度よりAT免除適応コース履修者を対象とした検定試験を実施している。現在（2012年12月1日現在）日本にはAT免除適応コースが61校（大学：31校、専門学校：30校）存在し、本校も2008年に認定されAT教育に携わっている<sup>2)</sup>。免除適応コースのカリキュラムの一環で現場実習180時間が課されており、これは学生トレーナーとしての現場経験不足を解消するために設けられたシステムであり、公認アスレティックトレーナーの下で指導を受けな

ればならないと定められている。

本学には有資格者のアスレティックトレーナーが4名おり（日本体育協会公認および全米アスレティックトレーナー協会公認）毎週月～金曜日（水曜日を除く）の午後4時半から午後7時半にスポーツ学部B館の103および104教室（リコンディショニングルーム：RCR）にて実習指導が行われている。この現場実習180時間は1)見学実習、2)検査・測定と評価、アスレティックリハビリテーションプログラム作成実習、3)スポーツ現場実習（ストレッチング、テーピング、応急処置等）、4)アスレティックリハビリテーション実習（プログラム作成、実施等）、5)総合実習の5つのカテゴリーに分かれており、3年生4年生を対象に開講されている実習形式の授業である。2011年度は4年生9名、3年生12名が履修をしている。また、本学には将来トレーナーを目指す者たちを中心に結成された学生トレーナーCARE（Community of Athletic training and Reconditioning Experts）という部活動があり、所属する学生は学年や経験の有無に関係なくアスレティックトレーナーの役割やプロフェッショナルリズムを学ぶために本学ではRCRにて活動を行うこれら2つのグループが日々活動を行っている。

本報告では、RCR利用者記録の開示をし、利用者数、外傷障害の部位、種類また利用者のスポーツを明確にする事を目的とした。

1) 九州共立大学スポーツ学部

1) Kyushu Kyoritsu University, Faculty of Sports Science

## 2. 方法

### 1) 期間

2011年1月6日から2012年9月13日.

### 2) 対象者

利用記録対象者は、RCR開室時間に外傷・障害の相談、リハビリテーション、リコンディショニング等を受けにきた本学運動部に所属する大学生RCR利用者.

### 3) 記録方法

利用者記録には、RCRに来室した日付、RCRに来室した時間帯、氏名、性別、学籍番号、所属する運動部、外傷・障害を有する部位、ATが評価した結果、ATが施したトリートメント内容等を記入する欄を設けた. この際、集計方法は一人につき一つの外傷、傷害または一人につき複数の外傷、傷害を保持して来室している利用者もいる事から延べ数をカウントした.

## 3. 結果

### 1) 利用者数

RCRの稼働日は243日であり、その間の利用件数は延べ1685件であった.

### 2) 男女別の比較

利用者の男女の割合は男子622名、女子1063名と女子の利用者が多かった (図1).

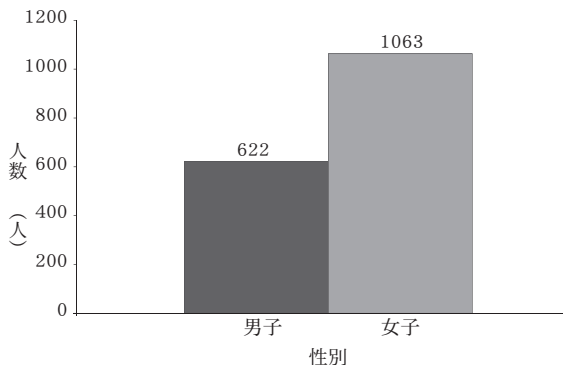


図1：男女別RCR利用者数(延べ)

### 3) 学年別の比較

学年別での利用者数を比較すると1年生423件 (男子：202件、女子：221件)、2年生303件 (男子：161件、女子：142件)、3年生512件 (男子：147件、女子：365件)、4年生446件 (男子：111件、女子：335件)、

不明が1件であった. 1・2年においては男女での差があまりないが、女子の利用件数が3年では男子の2.5倍、4年では3.0倍となり、女子の利用件数が圧倒的に多かった (図2).

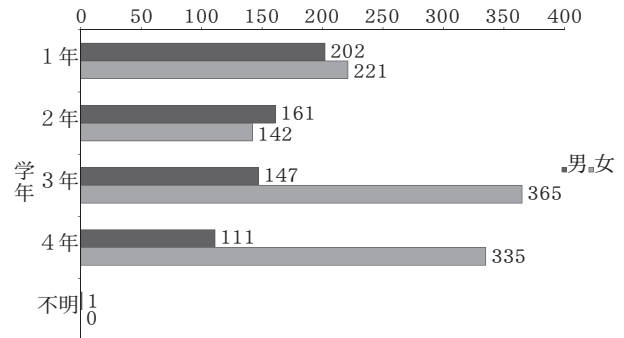


図2：学年別利用者数 (延べ)

### 4) 部活動別の比較

部活動別の利用件数で最も多かったのは、陸上で421件 (男子：106件、女子：315件)、次にバスケットボール288件 (男子：105件、女子：183件)、サッカー190件 (全て男子)、柔道178件 (全て女子)、バレーボール174件 (全て女子) と続いた (図3).

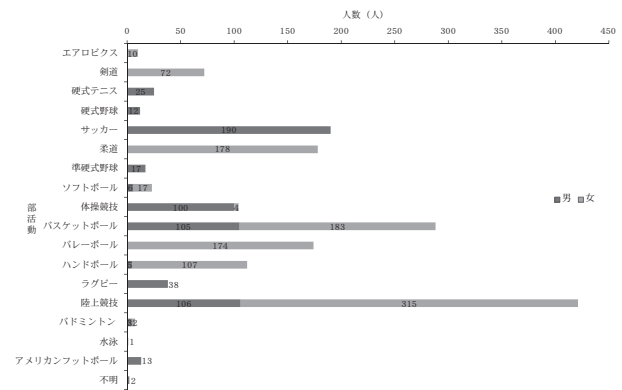


図3：部活動別外傷障害発生件数

### 5) スポーツ種類別

スポーツは大きく分けるとコンタクトスポーツ、リミテッドコンタクトスポーツ、ノンコンタクトスポーツと分けることができる<sup>3)</sup>.

#### (1)コンタクトスポーツ

コンタクトスポーツとは、スポーツにおいてプレーヤー間の接触の度合いを段階付ける際に用いられる. コンタクトスポーツはCollision sports とContact sportsに分けることができる. Collision とは衝突とい

う意味を持ち、スポーツでいうとボクシング、アイスホッケー、アメリカンフットボール、ラクロスやロデオのように力を抑制せずに直接接触する形式のスポーツである。Contact sportsは、相手選手に直接接触をするがCollision Sports より強さが少ないものとされている。これには、バスケットボールやサッカーが該当する。これらの二つを区別することは非常に難しく、今回は接触をする頻度を参考に区別を行った。コンタクトスポーツに属する部活動は、ラグビー、アメリカンフットボール、ハンドボール、柔道、サッカー、バスケットボールであった。コンタクトスポーツにおける外傷障害の部位別は、膝関節540件（男子：182件、女子：358件）と群を抜いて高い数字を示し、肘関節50件、下腿50件、腰部32件と続いた。膝関節の内訳としては、前十字靭帯損傷が一番多く、男女あわせて290件であった（図4）。

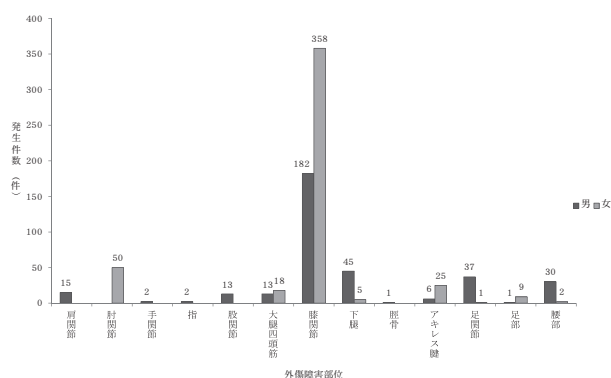


図4：コンタクトスポーツにおける外傷障害部位件数

## (2)リミテッドコンタクトスポーツ

リミテッドコンタクトスポーツとは、相手との接触をすることもありますが距離を置くことを主とする形式のスポーツで、野球やソフトボール、バレーボールなどが該当スポーツである。リミテッドコンタクトスポーツに属する部活は硬式野球、軟式野球、ソフトボール、バレーボール、剣道であった。リミテッドコンタクトスポーツにおける外傷障害の部位は、膝関節が189件（男子：2件、女子：187件）となり、その内訳としては、前十字靭帯損傷が多く男女あわせて144件であった。次いで、肩関節56件、下腿37件と続いた(図5)。

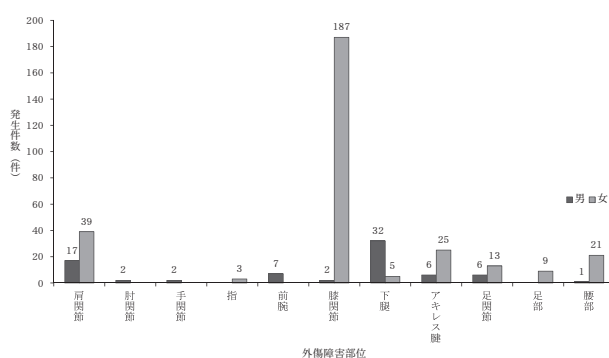


図5：リミテッドコンタクトスポーツにおける外傷障害部位件数

## (3)ノンコンタクトスポーツ

ノンコンタクトスポーツとは相手に接触をしないスポーツで、水泳やテニス陸上競技、ダンスなどがこれに該当する。ノンコンタクトスポーツに属する部活動は、エアロビクス、硬式テニス、体操競技、陸上競技、バドミントン、水泳の6つの部活動であった。ノンコンタクトスポーツにおける外傷障害部位は、膝関節155件（男子：116件、女子：39件）、股関節110件（男子：13件、女子：97件）、脛骨96件（全て女子）の順であった。膝関節の件数はコンタクトスポーツと同様に多かったが、他のスポーツと異なる面として股関節、脛骨の外傷障害も多かったというのがこのカテゴリーの違いである。股関節の外傷障害で最も多かったのは、Femoroacetabular Impingement (FAI)で85件であった。FAIとは、股関節インピンジメントといい、大腿骨頭が寛骨臼に衝突し関節唇が損傷する病態である<sup>4)</sup>（図6）。

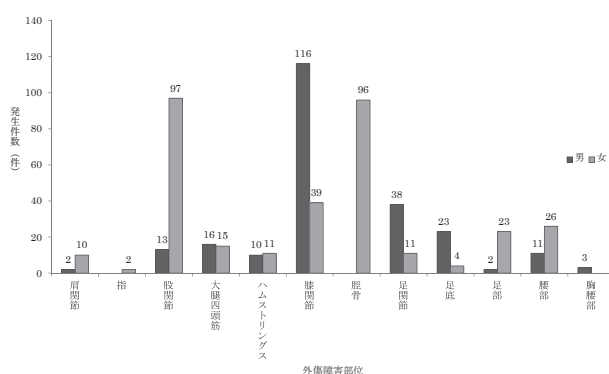


図6：ノンコンタクトスポーツにおける外傷障害部位件数

#### 4. 考察

前回の報告(2008-2009)と比較すると、利用者件数は2009件から1685件と減少した。これには様々な要因があると考えられるが、一つは学生トレーナーの現場での活動が影響していることが考えられる。2008-2009年は、現場で活動している学生トレーナーは3名(陸上競技、ラグビー、バスケットボール)であったが、2011-2012年は14名(ラグビー、バスケットボール、男子ソフトボール、女子ソフトボール、サッカー)の学生トレーナーが活動している。この現場で対応が出来る人材の普及により、テーピングなどの応急処置はもちろんのこと、障害の予防やコンディショニングの指導も現場において行うことが可能となってきたと考えられる。2008-2009年度の報告において最も多かった外傷障害部位は膝関節で588件であった。また、2011-2012年も884件と膝関節の外傷障害が最も多かった<sup>6)</sup>。膝関節の外傷障害の件数が多くなった原因としては前十字靭帯損傷後に行う手術療法に伴うリハビリテーション、リコンディショニングの時間の長さが影響したと考えられる。一般的に前十字靭帯再建後のリハビリテーションは時間がかかるといわれており、競技復帰するには9カ月前後を要する<sup>7)</sup>。故に、膝関節の外傷障害の件数が多かったのは、これらが影響すると考えられる(図7-8)。

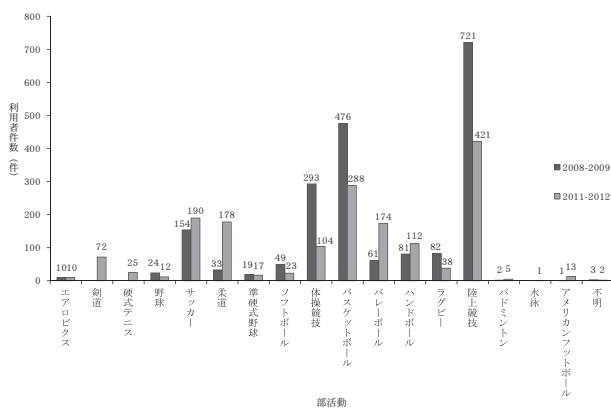


図7：2008-2012年における部活動別RCR利用者件数

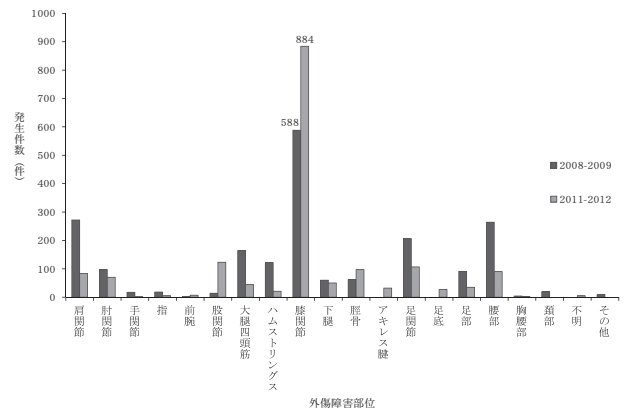


図8：2008-2012年における外傷障害部位件数

#### 5. 今後の検討課題

今回は、2011年から2012年におけるRCR利用者記録の開示を行った。利用者数、外傷傷害の部位、利用者のスポーツを明確にする事でRCR利用者の外傷傷害の傾向を明らかにした。今回公開した記録は、今後さらに学内の様々なスポーツのサポートをするために、記録を組織内の学び、発展だけに貢献させるのではなく、部活動にも適切にフィードバックしていく必要がある。その為には、部活動との連携をより強固なものにし、指導者やコーチたちと密にコミュニケーションをとり、選手の現状の報告並びに今後どのようにチームに合流させ完全復帰させるのか互いの視点から意見を出し合い一番良いであろう道に選手を導くことが重要である。その為にも、一人でも多くの学生トレーナーが、アスレティックトレーナーとしての基礎を早期にRCRで学び、正しい評価、それを踏まえたリハビリテーションやコンディショニングの処方をおこなうことが出来、選手と指導者の架け橋となるべく現場での実践的経験を積むことが必要と考える。

Received date 2013年1月8日

#### 6. 参考文献

- 1) 財団法人日本体育協会(2007):公認アスレティックトレーナー専門科目テキスト1 アスレティックトレーナーの役割.日本体育協会.
- 2) 日本体育協会  
<<http://www.japan-sports.or.jp/coach/tabid/226/Default.aspx>>.(2012/12/1アクセス)
- 3) Rice S.: Medical Conditions Affecting Sports Participants. Pediatrics. 2008; 121; 841-848
- 4) 内田宗志:股関節鏡手術-FAIと関節唇損傷-月刊スポーツメディスン.24(2):8-13

- 5) 井手裕子, 藤井均:九州共立大学におけるアスレティックトレーニンググループ利用者記録の役割.九州共立大学スポーツ学部研究紀要.4:67-72
- 6) 財団法人日本体育協会(2007):公認アスレティックトレーナー専門科目テキスト7 アスレティックリハビリテーション.日本体育協会.